

隨泉寺寺報

平成 25 年 (2013 年) 4 月号 第 5 1 2 号

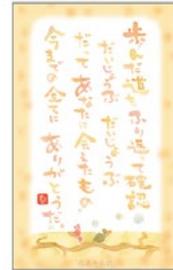
TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季永代経法要

講師 住職自修

講題 『はなまつり』



■ 4 月 8 日は「花まつり」と言い、お釈迦さまのお生まれになった日です。

色とりどりの草花で飾った花御堂（はなみどう）の中にお釈迦さまの像をご安置し、ひしゃくで甘茶をかけてお祝いします。

お釈迦さまがお生まれになったとき、甘露の雨が降り、それを産湯につかわれたという伝説がその由来です。

また、お釈迦さまのお母さまが、白い象が体内に入る夢をみてご懐妊されたという言い伝えがあるため、白象もそばに安置されています。

お釈迦さまのお父さんは、シュッドーダナという国王です。ちなみに漢字では、浄飯王（じょうぼんのう）と書きます。

インド北西部、ガンジス川を上っていくと、ヒマラヤに突き当たります。その山麓に、カピラバストゥという国がありました。迦毘羅国と漢字では書きます。

釈迦族の王シュッドーダナ王の治めていた国です。

王のお妃さまの名は、マーヤ。摩耶夫人と呼びます。この摩耶夫人は、釈迦族の近隣である、コーリヤ族出身だったそうです。生後一週間で母のマーヤーは亡くなり、その後は母の妹、マハープラジャパティ（パーリ語:マハーパジャパティ）によって育てられたそうです。

4 月の法座予定

- 4 月 2 日 …… 本部役員会
- 4 月 14 日 …… 掃除 出口・宮原
- 4 月 14 日 午後 1 時半より …… 庫裏増改築実行委員会
- 4 月 21 日 午後 2 時より …… 婦人部役員会
- 5 月 2 日 午後 5 時より …… 門信徒会本部役員会

☆☆ 育メンのすすめ

隨泉寺に待望の赤ちゃんを授かりました。男の子です。新発意（しんぼち）です。十日近く遅れていたのが心配していました。私の子供はみなせっかちなのか、予定日より早く生まれましたが、のんびりやなのか、お母さんのおなかの中が居心地が良いのか、ゆっくり生まれてきました。

とにかく、家族全員が大変です。とりわけ、若院（おとうさん）が、こまめによく育児をします。今流行の育メン（育児を積極的にする男性）です。



ここ数年本屋に行くとも男性向けの育児雑誌の充実しています。父親の育児参加の重要性が叫ばれています。父親の育児参加が重要なのは言うまでもありません。しかし、そのような雑誌の特集に違和感を覚えることが多くあります。それは「成功する～」や「失敗

しない～」などの文字が並ぶことがあるからです。全体として成功する育児を目指しています。育児の成功が悪いはずはありません。親なら誰もが願うことでしょう。

日本の子どもたちは世界で一番寂しいと感じているといわれています。それは核家族で少ない家族で育てられているので、いつも一人で寝せておられたり、ほおっておかれることが多いからです。昔はおじいちゃんや、お姉ちゃんや、沢山の中で育てられました。

親が敢えて子どもたちを寂しがらせるようなことはしないでしょ。だからおそらく子どもたちがその様に感じていることを知らない場合もあるでしょう。つまり、親は成功したと思っ



オンラインパパ講座

パパ塾

ても変わってきます。いい大学やいい会社に入れることでしょうか。しかし、新聞などを見れば分かるように、有名大学や有名企業に入っても、悪事をはたらくことはあります。もちろん、一人の成人した大人がやったことだから、その親が悪いわけではないでしょう。しかし、親からすればあんなに一生懸命育ててやったのに、何故？ という後悔の念はおこるのではないのでしょうか。また、さらに重要なことは、いわゆる高学歴をはじめとした、人生のキャリアと、人生の充実度はべつであることもまた自明なことです。つまり、私が言いたいのは、育児を単純に成功や失敗という形でとらえることは、案外難しいのではないかと、ということです。

4 月 8 日は釈尊の誕生日（花まつり）です。釈尊の父、スッドーダナ王は悩めるシッダールタ王子の内 理解できませんでした。そしてシッダールタ王子は出家してしまい、父の望む次期国王となることはありませんでした。これは一見、育児の失敗例に思えます。きちんとすることを聞くように育てておけば良かった、という後悔があったかもしれませ。しかし、そのような出家があったからこそ、仏教が開かれ、人類は救いをあたえられました。その意味では育児は大成功であったとも言えます。育児も人生も成功は一つではないのでしょうか。

4月

本願寺第24代門主 大谷光真様が、本願寺に念仏奉仕団で、参詣された方々にお話された御法話が、本になりましたので、毎月少しづつ転載いたします。

「光をこうむっているながら こうむっていることに気付かない」 (早島鏡正)

宗教という言葉聞いて、皆様はどのようにお感じになるでしょうか？最近の日本では、あまり良い印象がないようです。私は、何か悩みがあって、助けを求めて、駆け込んでいくところ、すぎる所といった事を思い浮かべます。それはそれで、もっともなことですが、ともすると、自分の悩みにあわせて、都合よく宗教を捕らえる、すがり付くという恐れがあります。親鸞聖人のみ教えを聴かせていただきます時、大事な事は、自分の悩みや課題は聞法の縁であり、根本は、阿弥陀如来様のはたらきです。気が付いているときも、いない時も、私を支え、真実の世界へと、呼び続けて下さる阿弥陀如来さまのお慈悲のはたらきこそ、根本であることを、忘れないようにしたいものです。このお慈悲に支えられ、導かれて、共に手を取り、御同朋御同行と歩ませて頂きたいものです。



大谷 光真

人間の驕り 一部屋の中で「猛獣」を飼ってしまったー

東日本大災害から二年がたちました。いまだに復興の兆しは見えません。福島原発事故は非常に深刻な環境汚染をもたらしました。恐れていた、取り返しのつかない事態が現実になってしまったのです。



トラブル発生当初、東電は、原発を襲った津波が想定外の規模であったと、繰り返し強調しました。確かに、想定外のことはいつでも起こりえるし、すべての想定外の事態を想定して万全の備えをなすことなど、私たちに不可能であるといっているでしょう。

だが、地震や津波そのものの災害はいざ知らず、このたびの原発事故は、現代人の驕り（おご）りが招いた災害であることは明らかです。隕石（いんせき）の衝突、火山の大噴火など、私たちの住む地球には、どうすることもできないリスクがつかねづまっています。

しかし、それらはあくまでも「天災」なのであって、人間が作り出したリスクではありません。それに対し、原発のそれは、人間の限りない欲望と傲慢（ごうまん）さが生み出したリスク以外の何ものでもないでしょう。

飽くことを知らない人間の欲望は、部屋の中で「猛獣」を飼うことを欲したのです。自分一人が暮らす部屋ではない。老いも若きも、未来を背負う子どもたちも暮らす居住空間に檻を拵（こしら）え、「猛獣」を飼うことを選んだのです。

人々の欲望を餌に、「猛獣」の飼育を勧めてきたと同時に、自ら檻の管理者を買ってでて、根拠のない安全神話をまき散らして回ってきた罪は重いものです。「電力が不足しています」「二酸化炭素は環境の敵です」「だから原発は必要です」などと、人々を誑（たぶら）かす欺瞞（ぎまん）語を並べ立てながら、原発の危険性に警鐘（けいしょう）を鳴らす人たちの声を抹殺することに努めてきたのです。



だが、いったん檻が破られて環境中に放出された「猛獣」は、もう手のつけようのないことはいまでもありません。

はかなくも、今回の事故によって、いかに技術的に未熟であり、管理体制も極めて杜撰（ずさん）であったことが露呈（ろてい）されたかたちとなりました。これは紛（まぎ）れもない「人災」です。それも、「自力」の妄念の極みによってもたらされた「人災」なのだと思います。

近代以前の日本人にとって、諸価値の規範はどこに置かれてきたかという点、《自然》の中で生かされていることに喜びを感じていました。大きなはからいの中で、まさしく《他力》を感じながら生かされていました。



里山に暮らす人々も、田園に暮らす人々も、漁を生業（なりわい）とする人々も、夏の初めにはこぞって五穀豊穰（ごこくほうじょう）や海の安全を願い、秋になれば神々に大地の恵みを捧げ祭ってきました。正月には一年の無事を感謝し、新たな年の無病息災を祈願してきました。日本人は「無事」であることにこそ、何にもまして価値を見いだしてきたのです。

そこでは、循環・再生が可能であることが、

ほとんど唯一の倫理の規範とされたのであり、このサイクルを壊す人間の営為は、すべて倫理に反するものとされてきました。

現代人には、そうした規範がかつての私たちの生活の基盤にあったことに思いを馳（は）せることすら難しくなっているのかもしれない。それは、「自然」【じねん】と呼ばれる環境とともに、環境を構成しているさまざまな無数の他者とともにある生活でした。そこには「他力」に乗じた暮らしがあったのです。

